

大阪医科大学附属病院 精神神経科

住所	大阪府高槻市大学町 2-7	電話	0 7 2 6 8 3 1 2 2 1
病床数	6 0 床	病棟数	1 病棟

人権センターニュース No.81 より

オンブズマン活動報告

平成 18 年 12 月 7 日訪問

精神科全体について

病院側の説明 病棟単位は 1 病棟であり、56 床。閉鎖エリアが 36 床、開放エリアが 20 床。満床になることはない。現在の看護体制では満床になると目が届きにくくなり十分なケアを行うには無理があるため、入院患者数 45 名程度までで維持している。平均在院日数は 45～50 日。

外来への通院患者が入院することが最も多い。他は近隣のクリニックからの紹介、合併症の患者の転院など。患者の大半が合併症で、府内だけでなく府外よりの問い合わせも多い。受け入れきれないため、断ることも多い。ベッド数を削減して 1 室に 4 床とし、同病院の他科と同等の環境にしたいが、実現できていない。

大学病院としての使命は医師・看護師の教育や研究である。卒後 2 年の研修医が 1 ヶ月ずつ担当医として患者につく。看護師も新人が多い。合併症の看護についてなど、そのつど皆で学習会をし、看護に当たっている。難治性の鬱病の患者の希望により、麻酔医と一緒に電気痙攣療法を行うこともある。インターネットで電気痙攣療法を知り、これをしてほしいと言って来院する患者もいる。

病棟について

病院側の説明 任意入院 22 名、医療保護入院 17 名。任意入院の閉鎖処遇は 6 名。患者 1 名に医師 3 名（指導医、主治医、担当医）と受け持ち看護師がつく。

意見箱は病院として院長、部長等の責任者会議で検討し、回答できる件は広報に掲載する。個人名があれば、その個人に返す。これまでの例では、食事に対する希望や、部屋が汚いなどがあった。ハード面については、なかなか回答できていない。

貴重品入れ利用料や金銭管理手数料は無料。開放の患者は売店の利用、病院外の近くにあるコンビニへの買物も自由。

診察はほぼ毎日担当医が回診している。薬は詰所前に患者が取りに来る。病院側によると「サービスという視点から考えて、看護師が病室をまわって配薬することを検討中。マニュアル化しているところ」とのこと。開放病棟では薬は自己管理。

退院に向けての取り組みとしては宿泊訓練を行っている、デイケアに 3 名が通っている。患者は担当医や看護師に相談をする。個別には病院の医療相談室のワーカーが入る場合もある。詰所でのスタッフ会議で情報を共有し対応している。

病棟の様子 病棟の中央に詰所があり、その前の廊下を扉で仕切り、閉鎖エリアと開放エリアに分離している。詰所のまわりは上半分、透明のアクリル板があり、出入口の扉は施錠されていた。ロッカーの上に患者制作のツリーが多数並べられていた。喫煙は分煙室があり、1 日 4 回の喫煙時間になっていた。

開放ゾーンでは 1 名の面会者がベッドサイドで患者に静かに話かけていた。他は数人の患者しか病室におらず、外出中の患者が多いのと、看護師は詰所にいて、とても静かだった。廊下にはテーブルセットが 2 ヶ所、給茶器があった。クリスマスツリーが飾られ、豆電球が点滅していた。外出時はノートに記名して自由に出入りでき、1 日あたり 10 人前後の記入があった。院外外出、外泊時は「外出・外泊許可願いが必要」とあった。デイルームにはテレビ、ソファ、新聞、樹木があったが誰もいなかった。公衆電話には囲いはなかった。電話帳があった。

閉鎖ゾーンのデイルームは広く、天井が高く、光がたくさん入っていた。話し声や音が響かず、静かな雰

囲気だった。面会の人々が数人いたが、広くゆったりとしたスペースがあるため、話し声は他の人に聞こえない。面会室もあった。患者の表情は特にイライラしていない。テレビを見たり、読書をしたり、それぞれが自分のペースで過ごし、ゆっくり休息しているという感じがした。

【隔離室】モニターカメラ、集音マイクはあり、ナースコールは「携帯用のものを持ち込むことがある」とのことだった。トイレには囲いがあり、手洗いや水洗の操作は室内からと室外からの切り替えができるようになっていた。時計、カレンダーがあった。

【病室】3人、4人、6人部屋と個室3室があった。数人が横になっており、出入口扉は開けてあった。

床頭台は小さかったが、ベッド周りに荷物が置かれているということはなかった。看護師によると「入院期間がそんなに長くないので荷物は最小限を持ち込んでもらっている」とのこと。

開放エリアのベッドサイドのカーテンは淡色で、開けている患者、閉めている患者と様々だった。床頭台は木目調で後方に衣類を吊るせる。引き出しの中に金庫があり貴重品を収納できる。テレビ（テレビカードを使用）と冷蔵庫が設置されていた。ナースコールはベッドの柵に巻きつけてあり、寝たまま使える。エアコンは室内にスイッチがあり、自由に調整できる。ベッドの上で使えるローラーのついたテーブルがあり、私物が置いてあった。建物の外に面する窓ガラスは大きく、開け放たれていた。窓から見える庭の花や植木が美しかった。個室（1日6300円）には洗面台があった。

【トイレ】開放エリアの洋式トイレはウォシュレットだった。においはなく、ドアやタイルの色も明るかった。洗面所には消毒液とペーパータオルがあった。

【浴室】湯船の上は天井が高くなっていて大きな窓があり、とても明るくて開放感のある浴室だった。看護師の説明「病棟を造った頃の病棟責任者があるゴルフ場の浴室を見て、明るくとてもよい雰囲気だったので、それを参考に造られた」。入浴は週4回。

患者の声「診察は多いと思う。いろんな人（複数の医師や看護師）によく話をきいてもらえる」「診察は毎日ベッドサイドに担当医が来てくれる」「入浴は週に4回で午前と午後に男女で分かれる」「金銭は床頭台の中にある金庫にしまっている。食事はまあこんなものでしょう」「病棟から自由に院内の売店や食堂に行くし、コンビニもあるから気にならない」「洗濯も洗濯機でしている、別に不自由はしていない」「食事は8時、12時、6時で15分前に放送があるのでそれを合図に移動する」「入院して間もない。診察では退院に向けての話をきいている」

検討事項

【閉鎖病棟のベッドまわりのカーテン】 閉鎖病棟ではベッドまわりにカーテンがなかった。病院側によると「着替えや処置のときにはスクリーンを使用する」「プライバシーもあり、検討しているが、事故（突然死）があり設置が進まなかった。現状ではカーテンを付けにくい、病棟の改修の際に対応したい」とのことだった。患者のプライバシーを守る配慮から、ベッドサイドのカーテンの設置について検討していただきたい。

【閉鎖病棟の窓についている鉄格子】閉鎖病棟との病室の窓に鉄格子がついていた。病院側によると「改修の際には取り外すことを検討している」とのことだった。ぜひ早めの実現していただきたい。

（人権センターが提出した精神医療オンブズマン活動報告書に対する大阪医科大学附属病院からの書面による訂正申し入れや意見等はありませんでした。）

人権センターが情報公開請求で入手した

H18 大阪府精神保健福祉関係資料より（大阪医科大学附属病院精神神経科分）

37名の入院者のうち統合失調症群が18名（49%）、気分障害が12名（32%）、入院形態は任意入院18名（49%）、医療保護入院19名（51%）、在院期間は1年未満が34名（92%）、5年以上（10年以上や20年以上を含む）が3名（8%）

（H18.6.30時点）